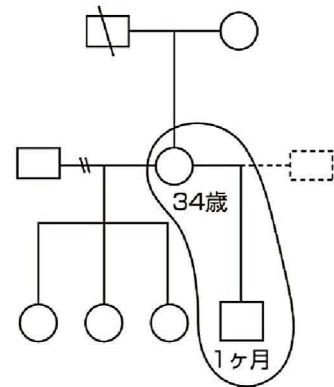


保健師が対象者に寄り添うことを学んだ事例

第4子の出生時に病院からハイリスク依頼があり、保健師の支援開始となった。第1～3子が施設入所している経過もあり、保健師支援開始の時点で、児童相談所が音頭とりをしてしっかり関わっている状況ではあった。

母子世帯、母親は気分障害の診断で、他にも主治医からは人格障害の疑いと、知的レベルが低い（小6～中学生くらい）との話がある。これまで2回の離婚歴がある。同居している子どもは第4子、他の子ども達は児童福祉施設に入所中である。第4子の父親は近くに住む男性と思われるが、不明である。母親にとって4人目の子ではあるが、第1・2・3子は生後まもなく施設入所しているため、第4子にして初めて一人で育児をすることになる。第1・2・3子は母親の精神状態の悪化と虐待があり、施設入所をしている。



母親は自宅に人が入るのを嫌がっていたため、保健師の関わりも始めのうちは、訪問ではなく、離乳食実習に参加してもらったり、電話や来所などで育児や不安がないかの確認等を行っていた。応用の利かさはあるが、言われたことは真っ直ぐにやるまじめな母親なため、健診や予防接種は計画的に受診できていた。

児が6ヶ月になった時、保育園入所となる。入園してしばらく経ったある日、連絡なく母親のお迎えが遅くなったことがあった。母親と連絡が取れず、園から保健師へ連絡がはいる。保健師が園へ外向いたときには、ちょうど母親がお迎えをしているところだった。時間に遅れてしまった自分にイライラした母親は、保健師の見ている前で児の頭を殴った。

遅くなったから、なんか申し訳ないとか、自分が許せないとか、そんなのがあって、フンッてやってしまったみたい。その後に話しをしたらね、ポロポロ涙を流して「悪いことをした」って、すごく反省をするのね。こういう所、何度も「この人の母性って本物かな」と思って、いつもそのたびに確認したりするけど、やっぱりこういう所を見ると印象的だね。やっぱりこの人、母性はあるんだっていうのを確認できたっていうか、短気だけど、やっぱり情はこの人の中にあるんだなって、ちょっと安心した。

主治医もカッとしたら何をするかわからないとは言っているから、やっぱり要注意人物ではありますね。だけど、どっかで母性もあって、一生懸命やれるときはやってるんですよ。愛情かけて。衣類もしっかり洗濯してね、ネグレクトとかではないのね、ちゃんとしっかり。でも、母親のメンタルが落ち込んだらもう、とてもじゃないけど、暴言吐いたり、振り回したり。「早く歩け！」とかね、引っ張ったり。階段を蹴飛ばして、2・3段転げたりとか。保育園の園長はそれを見ているから、お家に帰ったら大変なことになるって、児相とか主治医とか保健師に連絡があったり、こんな感じではやってきたんですけど。でも、相当落ち込まない限り、多少の暴言は口からの出任せだなんていうのが最近わかったんですよ。「じゃあやっぱりちょっと、その部分は信頼しよう」と。

その後、しばらく経って、第1子である長女が、中学卒業を機に母親の元へ戻り、自宅で一緒に暮らすようになる。しかし、母親と長女の馬が合わず、喧嘩をした長女は自宅を出て行ってしまふ。その後、長女は自宅に戻ってくるが、事件に巻き込まれて妊娠をしていることがわかる。母親は墮胎をするように説得したが、長女は「生みたい」と、母親の説得を受け入れなかった。しかし、児童相談所や周囲の人が説得すると長女が説得を受け入れたため、母親は怒って墮胎の書類に印鑑を押さない、となってしまう。

「あんなに私が一生懸命、母親として、何年ぶりに母親として一生懸命関わろうって、心を入れ替えてやろうとしたのに、言う事聞かない。あんなに私は心配もして、夜も眠れないくらい一生懸命やった。なんで周囲の話しだったら聞くのって、じゃあ私って何」って。もうあとは怒って、もう、あなたなんかどうにでもなれみたいな。

母親の対応に対して、女性相談員や警察等の関係者は「印鑑も押さないで、母親は子どもの事を何考えてるの。母親が悪い」と、母親を責めたが、保健師は母親の気持ちに寄り添うことを心がけた。

やっぱり、ちゃんとしっかり保健師はこの人の味方になってあげないといけないかなと思った。こんな時こそ、やっぱり保健師って、ケースの気持ち、しっかり話も聞いて、支えていかないといけない、味方にならないといけないなって。私は母親の気持ちわかるわけよ。この人はこの人なりに一生懸命、仲良くしたいって。ただやり方が悪くてトラぶったりするだけで。親として一生懸命やってるのに聞いてくれなくて、他の人の一言で気持ちが変わる。「じゃあ私の説明、何だったの」って思うじゃないですか。だから、母親の気持ちもわかる、だから決して母親も悪いとは思わない。私は地域にいるから、私がこの人を「味方よ、味方だよ」っていうふうな立場でちゃんと接していかないといけないなって、あの時思いましたね。

感想：虐待する母親に対し、関係者は母親を責めがちである。しかし、今回の事例で保健師は、母親の母性や養育力をアセスメントすると同時に、母親の味方になることを心がけている。保健師が味方でいることで、母親の心の拠り所、居場所ができ、長く地域で関わっていけるのだということを感じた。この事例を通して、ケースの話しや気持ちをしっかり受け止め、寄り添うことの必要性を特に感じた。

(屋比久)